

---

# Best Friend

神崎鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Best Friend

### 【コード】

N4000J

### 【作者名】

神崎 羚

### 【あらすじ】

新しく転校した学校で新しくできた友達はクラスで嫌われてる女の子だった……  
はじめはそんなこと知らないで仲良くしていた。  
しかし、だんだんわかりはじめて……

嫌いだった、はずなのに

これは、私がある中学校で出会った、一人の女の子のお話。

「優美　！一緒に帰ろう！」

その声に振り向くと、やはりあの子がいた。

隣のクラスの山畑みずき。

髪は短く、肌は少し黒い。

ボーイツシュという言葉が一番合うその子は、笑顔で私に駆け寄ってきた。

「みずき…」

私は彼女のことを嫌いだった。

私のみずきに出会ったのは一年前。父の転勤でこの学校に転校してきたのがきっかけだった。転校したてで友達もいなく、周りから孤立しかけていた時に声をかけてくれたのがみずきだった。

「菊池さん、はじめまして！私、山畑みずきっていうの。よろしくね！」

うれしかった。新しい学校で不安だらけの私に、親切にいろんなことを手取り足取り教えてくれたから。私はみずきと一緒に過ごす時間が多くなった。

でも、そのうちにみずきは何かにつけても私にくっついてくるようになった。

私はあまり人付き合いが激しい人ではないから、実際に前の学校でも友達はそのままで多くはなかった。

そんな私からすれば、みずきはうっとうしい存在、だったのだ。

みずきを本当に憎く感じたのは、秋の宿泊学習。

宿泊の班決めるとき、私は初めて隣の席の子から声をかけられた。

「えっと、菊池さん…だよな？私の班一人足りないからさ、一緒に組まない？」

みずき以外の子から声をかけられたのが嬉しくて、私はすぐにうなずいた。

単なる数合わせだっていうのは分かっていたけれど、それだけでも私の存在をみんなに認められたと、そう感じたから。

小学校の修学旅行のときみたいに、女の子たちと夜中まで仲良くおしゃべりができると思うと、顔がほころんだ。

でも、それもつかの間のことにはすぎなくて。

「優美　うちら一斑だって！相澤さんと池田さんと、4人になったよ」

みずきは勝手に私を自分の班の一員にしたのだ。

その瞬間、私の夢はガラガラと音を立てて崩れていった。

当日はあいにくの雨。秋雨にしては梅雨みたいにじめじめとしていて気持ち悪い。

宿泊は本当につまらなかった。

おまけに誘ってくれた子達には『裏切り者』と言われる羽目に。

みずきに何もかも壊された　そんな気がした。

宿泊学習のあと、不登校に何度もなるうとした。でも、しなかった。出来なかった、のかもしれない。

家族に自分のこんな姿を知られたくなかったから。逃げているみたいでいやだったから。

でも、そんな事思っていたって、結局みずきという存在から逃げていたんだ。

そんな私に、ある日思いがけない知らせが届いた。

それは、2度目の父の転勤だった。

「今年転校したばかりだし、来年は受験もあるから今優美を転校させるのはかわいそうじゃない？」

母はそう言つて、父の単身赴任を提案した。

しかしその時、私は思つてもいない事を口にした。

「転校だったらもう2回目だし大丈夫だよ！それに、お父さんと離れるのはいやだな……」

両親からすればなんて親孝行な娘、と言つたところだろうが、私はそれを『逃げ道』に利用したのだった。

そうして私の転校は決まった。

そして、転校当日。その日の朝は、雲ひとつないきれいな秋空が広がっていた。

私は、もうみずきに会わなくていいという嬉しさと、新しい学校への期待で胸をふくらませていた。最後に散歩でもと思家家の門に手をかけたとき、郵便受けに一通の手紙が入っているのに気がついた。それは、みずきからだった。

住所が書かれていないところを見ると、大方昨日の夜こっそり家まで来て入れていったのだろう。便箋を開くと、みずきのお世辞にもきれいとは言えない字が並んでいた。

優美へ

今日でお別れだね。優美と過ごした一年は本当に幸せだった。実は私、友達がいなくて学校つまなくて不登校になってたんだ。でも2学期の始業式に久しぶりに学校に行った時優美が転校してきた。優美を一目見て、この子なら私を受け入れてくれるかもしれないって思った。そんな私の勝手な思いで今まで振り回してきて、ごめんない。

でも、優美のおかげで私は学校に行けるようになったし、毎日が楽

しく感じられるようになった。本当に感謝してる。ありがとう。  
みずきより

ぼつり。

雨は降っていないはずなのに、手紙に一つ、二つと水皺が出来てい  
た。

どうして？

あんなに嫌いだったみずきからの手紙で、こんなにも涙があふれる  
なんて。

こんなにも胸が苦しくなるなんて。

そして脳裏に蘇る、自分に向けられた笑顔。

私のなかで、何かが弾けた。

フライトの時間の都合上、みずきにさよならの一言も言えずに、私  
は離陸直前の飛行機の客席に座っていた。

それまでずっと服のポケットにしまっていた封筒をもう一度取り出  
す。

その中には、先ほどの手紙と、あともう一つ、あるものが入ってい  
た。

黄色い福寿草を押し花に仕立てた、小さなしおり。

祖母の家で咲いているのを何度か目にしたのだからだろうか、  
ふつと花の名前が出てきた。だがこの花をどんな意味をこめて選ん  
だのか、私には分からない。

まもなく離陸致します。座席ベルトをもう一度お確かめ下さい…  
機内アナウンスがかかり、乗客は離陸の準備をし始める。

私は目を閉じ、心の中でそつとつぶやいた。

「元気でね」 自分の中のみずきの笑顔に微笑み返しながら。

(後書き)

こんな駄話を読んでくださって本当にありがとうございます！

もっとクオリティー上げていい小説書けるように頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4000j/>

---

Best Friend

2011年1月7日17時45分発行